

L'Echange

La Société Franco-Japonaise des Techniques Industrielles 日仏工業技術会

L'Echange は、特に次世代を担う若い技術者・関係者に向け、日仏工業技術の

FREEPAPER 第9号 2021年4月発行

交流・普及を促進することを目的としたフリーペーパーです。

● 巻頭特集 ● 都市計画史研究者・松原康介氏
● 都市 ● 日仏の床下
● 文化 ● モーパッサンにみる男性中心社会
● とは
● 言葉 ● カレイ

Special

Urban

Culture

Mot

L' Echange

巻頭
特集

第 9 号

都市計画史研究者・松原康介氏 Chercheur Kosuke MATSUBARA

フランス語圏の都市計画史



松原康介氏（筑波大学大学院
システム情報工学研究科 准教授）

1973年神奈川県生まれ。筑波大学システム情報系社会工学域・国際総合学類准教授、地中海・北アフリカ研究センター兼任准教授。博士（学術）。専門は中東・北アフリカ地域の都市計画史。著書に『モロッコの歴史都市——フェスの保全と近代化』（学芸出版社、2008年）等。

筑波大学でフランス語圏の都市計画史を研究する松原康介氏。モロッコの歴史都市への興味から始まり、フランス語圏地中海地域の都市計画史の研究者の道へ。今回の巻頭特集では、松原康介氏に自身の来歴、研究についてなどを伺いました。

一 略歴について

モロッコの歴史都市に興味がありました。最初にモロッコに留学し、日本で博士論文まで書いたあとで、フランス政府給費研修員としてパリでポスドクをしました。その後、筑波大に職を得て、アルジェリアやシリア、レバノンといった、いわゆる仏語圏の地中海地域をもっぱら研究しています。

学部生のころからフランス語圏に興味あって、1998年に初めてモロッコに行きました。リスボンからはって、シントラ、エヴォラをへてアンダルシア（南スペイン）と、25歳で初めての海外旅行をしました。その時には都市計画、建築をやると決めていたので、リスボンのムーア城、アルハンブラ、セビリアなどのいわゆる都市遺産を出来るだけ多く見ました。そしてジブラルタル海峡を越えてモロッコへ。この旅が原点になっています。博士号は慶應 SFC の日端康雄先生の元で取得しました。ちょ



写真右：ダマスカスの住宅の中庭。
JICAの都市計画事業に参加し訪れた。

うど先生が『都市計画の世界史』を書かれていたころです。そして、フランス国立科学研究センター (CNRS) パリ建築都市社会研究所のフィリップ・ボナン先生の元でポスドクを行いました。

—研究内容のご紹介

分野的には都市史、都市計画史です。モロッコでもシリアでも、世界遺産でもある歴史都市が多くありますが、イスラームに独自の空間形成の結果、稠密ですが雰囲気のある旧市街が形成されてきました。また、その隣には、植民地時代に作られた、フランスのモダンな都市が存在していて、これがまた面白い。その共存関係に関心を持ちました。

私がやっていることは、フランス建築の本流からは外れています。あまりやっている人はいませんが、面白さでは良いテーマを選んだと思っています。狭義の都市計画、建築だけではなく、歴史や文化も踏まえながら、学際的に研究できているところにやりがい、面白さがあります。

最近、新学術領域研究という、大型の科研費プロジェクト「西アジア地域の都市空間の重層性に関する計画論的研究」を採択していただきました。若手中心ですが、陣内秀信先生、土居義岳先生などの泰斗も研究会にお呼びしています。元々、筑波大学には人文社会系の考古学の連綿とした流れがあって、こうした大型プロジェクトで実績がありました。今回、新しいプロジェクトを申請するに当たって、社会工学分野の私にもお声がけ頂いて、都市計画の研究として参加させて頂いたものです。西アジア考古学という、またとつもなく長い歴史スパンを考えなければならず、日々勉強させてもらっています。

7-8世紀以前の西アジアの状況は、頭のみで理解してきました。しかし考古学と接続してシリアの研究をする以上は、ヒッタイトなど世界史の教科書で習うような歴史との接続に配慮しなければいけません。一昨年に都市計画学会で発表した論文は、



シリア、アレッポの近郊にあるデッド・シティの前で。デッド・シティとは廃墟となったヘレニズム時代の町のこと。

オスマニザシオン（パリ都市改造にちなんだ、旧市街の道路開削の手法）という話だけでなく、ヘレニズム時代の基盤との接続を意識するようになった研究でした。ギリシャ時代、ローマ時代の都市計画についても、改めて勉強し直しました。考古学と接することで自分の世界がどんどん広がっていきました。

そうして学んだ都市計画の原論的なことは、これからどんどん発表していきたいと思っています。ヒッポダモスという伝説的な古代ギリシアの都市計画家がありますが、そんな発表も都市計画学会でまとめてもいいかと思っています。例えば、彼が設計したと言われるギリシャのピレウスという港町を訪問したのですが、街並みが完全なグリッドになっていて驚きました。ヒッポダモスは、通称「ミレトスのヒッポダモス」と呼ばれていますが、ミレトスには一昨年、イズミルから3時間車を飛ばして行ってきました。現在の都市遺構や街並みから、実証的に計画論を研究することは面白いと思います。トルコの研究者と話をしたりすると、アテネが今は中心に見えるが、かつてはイオニア側（現在のトルコ側）が発展していたという説を言う人もいます。どういう風にヘレニズムに繋げるか思案のしどころだと思っています。

実は2020年度は、私はサバティカルをもらっていました。フランスのマルク・ブルディエ先生ともコンタクトして、受け入れ研究者になってもらう予定でしたが、コロナで出発できていません。残念ですが、これまでもたくさん海外出張していたので、まあいいかと考えています。新学術領域などでも、調査ができないとこぼしている研究者がたくさんいますが、文献を改めて精査するとか、過去のデータをもう一度分析し直すとか、少し工夫しなければならないですね。

ーフランスとのご関係について

初めに1年ほどパリ・ソルボンヌ大学の文明講座で、デビュタンから語学留学をしました。それがフランス語を学んだ最初



写真左上：デッド・シティでの自撮り。キリスト教会の遺構。写真右上：バイルートにて。バイルート内戦（1975-1990）中におけるデマルケーションライン（東西勢力の境界線）に位置しており、銃創が生々しい。写真左下：アレppoのジャズ・フェスティバル。この後、大統領が飛び入り参加して驚いた。写真右下：アルジェの集合住宅ディアル・ル＝マフスール。建築家ブイヨンの作品。

でした。そこで初めて、パリの美しさ、食べ物のおいしさ、それにフランス的エスプリを知りました。

帰国が近づいてきて、フランス語が多少なりともできるようになってからモロッコに行くと、それまで英語でやりとりしていた時と比べて、まるでコミュニケーションの質が違うことに感激した記憶があります。

その後は、博士号をとったあとのポストドクで、ブルシエとして、日本建築を研究しているフィリップ・ボナン先生の下で学びました。その時のテーマは、番匠谷堯二さんという日本人都市計画家の、フランス圏での業績を解明するというものでした。今でも、このテーマが私の研究のオリジナリティの源泉になっているように思います。

研究者になるという決断については、最初にモロッコに行った時に、心から面白いと思えたので、やれるところまでやってみようとなりました。SFCの修士一年生だった時です。現代都市計画をやるのなら文献が大事だと思い、フランス語を選択しました。以来、フランス語は私の第一外国語になりました。フランスの書店は充実していて、例えば、パリ・サン＝ジェルマン＝デ＝プレのLa huneは夜遅くまで開いていてよくいりびたりました。多くの先輩や同年代の留学生たちに出会い、情報を教えてもらいました。在パリの方々からたくさんの刺激を受けました。

その後もフランスに滞在できる機会がちょくちょくあり、できるだけ多くの建築や都市を見るようにしてきました。たとえば、アルジェにフェルナン・ピヨンという建築家を実現したディアル・ル＝マフスールという地区があるのですが、これは「プロヴァンスの三姉妹」という修道院にインスピレーションを得たものといわれていました。また、ル・コルビュジェのロンシャン教会は、逆にガルダイヤのモスクにヒントを得たといわれています。それらを見に行くことで、フランス語圏地中海地域のイメージが出来てきました。学生を同行させることも多かったです。



写真左上：BNF(フランス国立図書館)。この下層階にある研究者用の閲覧室が、ポストドク時代の研究場所になった。写真右上：パリの学生宿舎シテ・ユニヴェルシテの正面建築。モダンで快適なイタリア館を好んで使っている。写真左下：友人の別荘があったトゥーロン。シュノーケルでウニを発見するも、硬くて取れなかった記憶が。写真右下：ル・トロネ修道院の質実剛健な外観。正面右側の小さな扉が正式な入口。

一最近の活動について

元教育大学の教員として、授業やゼミのほか、色々な教育活動をしています。3年ほど前に、ブルディエ先生にお願いしてパリのラ・ヴィレット建築学校と、協定を結びました。この3月に、そうして留学した最初の学生が修士を終えて巣立ってきます。彼女は卒論でマルセイユ、修論でアルジェを扱いましたが、よく育ちました。就職も良いところに行きます。本人には言いませんが、自分のような教員によくついてきたなと思います。

近年、国際化が大学で叫ばれています。筑波大の地中海・北アフリカ研究センターを通して、モロッコの大学とも協定を結びました。かつて私自身が留学したアル＝アハワイン大学です。原則、留学中の学生は放置ですが、時々私が行って一緒に街歩きをしています。学生が留学して現地を知って、自分なりに問題意識をもって卒論が書けたりすると、その後の修士での指導も効率的になってきます。最近では、自分の仕事として構想し、協定を結ぶようになりました。フランスではモンペリエのポール・ヴァレリー大学とも協定を結びました。現在はアルジェの諸大学と提携交渉の最中です。

一若者へのメッセージ

最近、学生が留学しないということが話題になっています。しかし、人々の分断が世界中で起きている今のような時代にこそ、留学してほしい。いまは奨学金制度も充実していて、「トビタテ！留学 JAPAN」などたくさんの奨学金があります。私などのころよりもずっとずっと留学しやすくなっています。フランスこそは、私のみるところ、世界の分断をくいとめるための、極めて重要な役割をもった国であると思います。

(聞き手:江口久美)



ル・トロネ修道院の廻廊と中庭。ル・コルビュジエやフェルナン・パイヨンも頻繁に訪れ調査を行ったとされる。

日仏の
床下

L'ECHANGE

都市

URBAIN

Sous le
plancherVue de Sainte-Pierre de Rome.
(1)

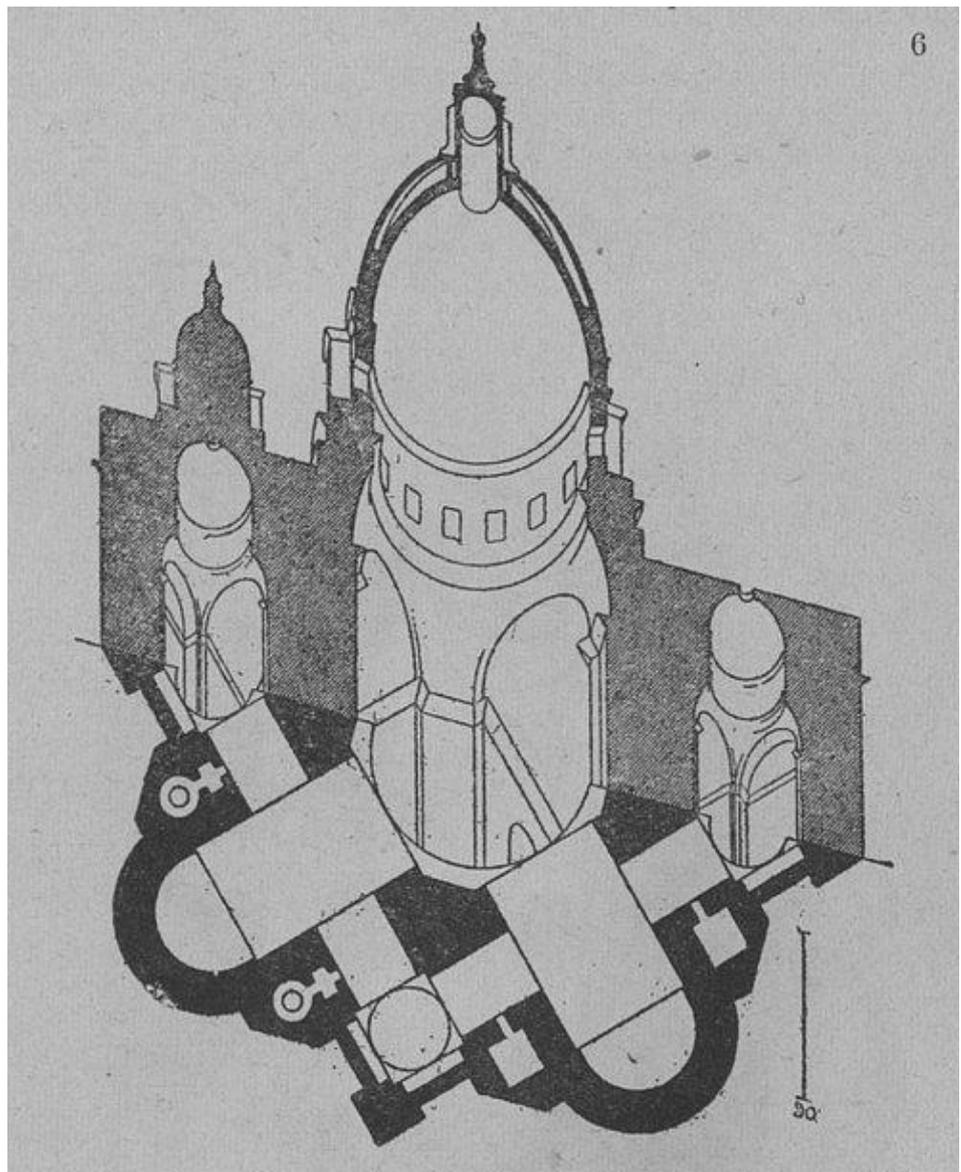
脚注：

(1): Auguste Choisy, *Histoire de l'architecture* tome second, 1943, p.507 (Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France). なお初版は1899年、BnFで公開されているのは1943年の Librairie Georges Baranger版。

日仏の床下

Sous le plancher en France et au Japon

職業柄、床下に入ることが多い。歴史的建造物の床下は懐が40cmにも満たないこともある。畳を上げ、その下の床板に開けられた点検口から暗い床下に入っていく。伝統木造の基礎は基本的に独立基礎、礎石であり、土の上に石を点々と置きそこに柱や束を置き、梁をかけ、架構を上に組んでいく。その架構に床と天井を水平に挿入して、人の空間が作られるのが日本の建築である。床板の下、地面との間には柱と束が立ち並んだ暗がり奥に奥に繋がっていく。その隙間のような空間をさまよいながら建物を支える足元を図化していく。時おり、床の上、人が居る部屋はどうなっていたかと想起する。その時、不思議なことに、部屋と床下の空間は別物であるということに気づく。部屋の壁は床下までつながっていない。床下から見れば壁は宙に浮いている。その壁は天井裏でまた消えて、小屋裏はまた別世界を呈する。日本建築の壁は床と天井の間の膜として理解できる。正確には壁ではない。



そんなとき、ショワジが“Histoire de l'architecture”で見せた、建築を下から見上げたパースは全く違う建築を見せてくれていることに気づく。ご存知の通り、ヨーロッパの古典建築は地面に支持された石の壁がそのまま2階、3階と上まで続き、石はそのまま斜めに積まれ始めて、もう片方の壁から積まれてきた石と出会い、ドームないしヴォールト天井を作り出す。床とは、その石の壁と壁の間に垂直方向に積んだものである。当然、壁は床下から上層までつづく。壁は浮かない。突如として床の上に壁が出現することはないのである。地面から綿々つつづいて天井になる壁。ショワジの見上げパースはそれをまざまざと見せてくれる。“Dans ce système, une seule image mouvementée et animée comme l'édifice lui-même tient lieu de la figuration abstraite, fractionnée par plan, coupe et élévation. Le lecteur a sous les yeux, à la fois, le plan, l'extérieur de l'édifice, sa coupe et ses dispositions intérieures”、よく引用されるこの文章は、その大著の本文一行目に掲げられている。

この風変わりな、地面の下奥深くから見上げたようなパースを書いたのはオーギュスト・ショワジ (Auguste Choisy, 1841-1909)、19世紀後半フランスの建築史家である。彼は土木学校 (École polytechnique) に入学後、国の土木機関 (Le corps des ponts et chaussées) に移り、ギリシャ建築調査に派遣された。その調査の際に、ギリシャ神殿の基壇や柱にある湾曲に人の視覚的な歪みを補正する機能がある、という発見をして独自の理論を提出する。その後、イタリア調査に行った際の成果を“l'Art de bâtir chez les Romains”として1873年に出版するが、そこで見上げパース (perspective axonométrique plafonnante) を挿絵として使うようになる。それまで、また今日でもそうだが、建築のパースは斜め上から建物の全体像を描くものとされてきたものを、彼は全く逆に、下から描いた。しかし、そこには建物の立面も部屋の大きさも部屋割りも一挙に見て取れるわかりやすさがあつた。彼は神殿も土木施設も、ゴシックもバロックも同じ視点で分析するが、そこには一種の近代的な建築の見方の一つの画期があるとして西洋建築史では欠かせない人物となっている。19世紀フランス、ヴィオレ＝ル＝デュクに限らず、建築家が建築史の研究を行っていた、まだ建築史家という人物像も確立されていなかった時代に、ショワジは観察を専門にする人間、建築史家ならではの建築への迫り方を用意したといえる。そのパースは、誰もが抱くであろう、建築を見上げた時のあのなんとも言えない高揚感を表しているようにも見える。

暗くて狭くてジメジメした床下でも、こういった想像をかき立ててくれる。とはいえ、日本の制度はコンクリートの基礎を要求するので、修復して活用するとなると上記のような比較論的な建築的特徴は皮肉にもなくなってしまう。やはり自由に独立して建築を見る建築史家の視点は必要ということである。それは設計者も同様で、上記のような発見的な建築の特徴を実現するのはこれからの課題ともなる。

(文責：角玲緒那)

L'ECHANGE

文化

CULTURE

Spécial

Urban

Culture

Mot

モーパッサンにみる 男性中心社会とは

最近、日本で社会における男女平等の在り方について熱い議論が交わされていたことは、読者のみなさまも記憶に新しいのではないかと。確かに、21世紀に入って女性の社会進出は顕著になりつつある。しかし、ひと昔前までは男性優位の社会であることに、大抵の場合、人々が疑義を唱えることはなかった。それは日本だけでなく、フランスにおいても同様である。18世紀末のフランス革命において「自由・平等・博愛」が掲げられたが、それは男性のみに該当する標語であったのである。つまり、この人間解放とは、女性の存在を度外視した、「男性の解放」にすぎなかったのだ。では、いわば当時の男性中心社会のなかで、フランス女性の立場とはどのようなものだったのだろうか。フランス革命に続く、19世紀フランス社会における女性の在り方を、我々は当時の文学作品から確認することができるだろう。今回、私が取り上げるギ・ド・モーパッサンも、そうした読



写真右：モーパッサン
(出典：パブリック・ドメイン)

解を可能にするフランス人作家のひとりであろう。

ギ・ド・モーパッサン（1850 - 1893）は、フランスの自然主義文学の代表的な作家である。彼はノルマンディー地方で幼少期を過ごし、その後パリに出るが、すぐに普仏戦争に従事し敗戦を体験する。一方で文学修行を続けてきた成果が実り、彼は『脂肪の塊』（『メダンの夕べ』所収、1880年）で文壇デビューを果たす。以後は、中短編小説のみならず、時評文、『女の一生』（1883）や『ペラミ』（1885）に代表される長編小説も執筆するなど精力的な活動を行った。彼はショーペンハウアーの影響を強く受けており、作品のなかでしばしばその悲観的な思想もみられる。しかし若くして精神病や梅毒を患い、43歳で逝去する。

広義における文学史上でモーパッサンが位置づけられている自然主義文学とは、リアリズムの記録的・客観的描写を極端に押し進め、観念的要素を一切排除した現実の忠実な再録による真実の探究を目指したものと定められている。自然主義文学においては、作家たちが現実の忠実な再録による真実の探究を目指すという文学思潮のため、作家たちにとってテーマは限られたものであったといえる。たとえば、自然主義文学の代表とみなされるエミール・ゾラ（1840 - 1902）やギュスターヴ・フローベール（1821 - 1880）は、博物学者や生物学者の法則（遺伝や先天性）を援用したり、物語の舞台背景となる歴史的・社会的状況を精緻に再現したりしたのであった。それに反して、モーパッサンは資料に頼るような手法はとらずに、自然主義作家として書くべき作法を軽視して作品をつくりあげたといわれる例外的な作家であった。つまり、モーパッサンは読者が求めているものを重視して作品を構想したと考えられている。では、彼が考えるところの読者や読者の期待とは一体何だったのだろうか。

モーパッサンが考えるところの読者像とは、彼の野心から窺い知れるだろう。アルマン・ラヌー（1913 - 1983）は、モーパッサンの野心について「Balzac des femmes du monde」という表現を用いて、「社交界女性に読まれるバルザック¹のような人気作家」になることとした。しかしここで注意すべき点は、当時の女性の書評等が残っていないため、具体的にモーパッサンの作品が女性によってどのように読まれたのかは断言できないということだ。それでも、モーパッサンが創作の

意図に女性を大きく占めさせていたと推測できるだろう。すなわち、彼の小説が女性の読者に向けられたものであるとする読み方もあるのではないだろうか。

実際、モーパッサンの小説では、女性に寄り添い、いたわりの念をあたえたものが見受けられる。たとえば、『脂肪の塊』（1880）では、愛国心の強い娼婦を通して社会のエゴイズムが風刺的に暴かれている。他にも娼婦の登場する小説がいくつかあり、作家はそこでの娼婦にも母性愛や愛国心などその身分とはそぐわない道徳的側面、つまり人間味ある姿を描くことで、読者の同情を誘っただろうと考えられる。また、『女の一生』（1883）では、結婚、出産、不倫や裏切りのなかで生きるヒロインの悲劇的な人生が描かれている。以上の作品の共通点は、男性中心社会の抑圧のなかで生きるヒロインの不幸を、悲劇的に提示していることである。ここにいわば、モーパッサンの「女性像」を見ることができる。どちらも娼婦やヒロインに慈悲を与えるような作品であり、男性の抑圧を受けていた女性読者はこうした作品を読んで、自身を投影していたのではないかと想定できる。では、なぜモーパッサンはこのような試みを行ったのだろうか。

モーパッサンは元来、次のような女性観を抱いていた——「この世において女性は二つの役割をもっており、両方ともとてもはっきりとしていて、魅力的なものである。それは、恋愛と母性だ。²」つまり、モーパッサンの考える女性の役割とは、社会的な活動から女性を排除した男性中心的な考え方に相当するものだろう。今日では偏狭的なものとされているこのような女性観は、19世紀のフランス社会のなかでは普通に存在していた。確かに、彼もそうした男性中心社会に無意識に組み込まれていた側面をもっていたといえるだろう。

¹ オノレ・ド・バルザック (1799–1850) は、19世紀前半に活躍したフランスの小説家である。彼は、複数の小説のなかで、ある特定のアイデンティティを持つ架空の登場人物を一貫した人物像として登場させる人物再登場法を用いて、100編以上からなる『人間喜劇』を完成させた。彼は近代小説の祖としてフローベールやゾラなど多くの作家に影響を及ぼした。

² « La femme sur la terre a deux rôles bien distincts et charmants tous deux : l'amour et la maternité. » Prévost Antoine Francois, *Histoire de Manon Lescaut et du Chevalier Des Grieux*, l'abbé Prévost ; préface de Guy de Maupassant ; illustrations de Maurice Leloir, Paris: Librairie Artistique - H. Launette, 1885, p.x. (執筆者訳)

しかしながら、他方ではモーパッサンはこのような見方ももっている。それは男性中心社会の男性に批判的な考え方である。

男性は、女性を判断する際には、決して正当ではない。いつでも、男性は女性を自分らにあてがわれた一種の所有物だと考え、彼女らを支配し、教化し、思いのままに閉じ込める、絶対的な権利を保持するのである。そして、社会主義者が国王を憤慨させるように、自立した女性は男性をいらだたせる³。

これは、モーパッサンが1882年の『ゴーロワ』紙のなかで、ジョルジュ・サンド（1804－1876）に関する時評文の一節で記したものである。サンドといえば、19世紀フランスの女流作家のひとりであり、自身の女性としての自由な生き方を謳っていた人物である。この記事のなかで、モーパッサンはサンドの芸術家としての立場には否定的であり、それは彼女だけでなく、あらゆる女性が芸術的な仕事に携わることについても、同様の態度を示していた。このように彼は芸術活動に関わる女性を批判しながらも、一方で男性の女性に対する支配的な態度も指摘していたのである。こうした、いわば自家撞着に陥っていることに、彼自身は気づいていただろうか。

さらにいえば、モーパッサンは上記の時評文のなかで男性中心社会に物議を醸していたサンドの思想について、哲学的原則がみられると称賛を送っていたのだ。ここで彼が当時、被支配的地位にいた女性、その立場について理解できていたとも、我々は窺い知ることができる。実際、彼の作品のなかでは、男性中心社会に抑圧された女性を描いたものが顕著であり、それはその社会に対する作家の問題意識の表出だったのではないか。

³ « L'homme, en jugeant la femme, n'est jamais juste ; il la considère toujours comme une sorte de propriété réservée au mâle, qui conserve le droit absolu de la gouverner, moraliser, séquestrer à sa guise ; et une femme indépendante l'exaspère comme un socialiste peut exaspérer un roi. » L'article « George Sand d'après ses lettres » par Guy de Maupassant, *Le Gaulois*, 13 mai, 1882, p.1. (執筆者訳)

換言するならば、モーパッサンは当時の女性の立場を理解できていたが、実際にはその現実には正面から向き合うことを避けて、社会運動に参加することもなかった。男性中心社会に対する問題意識を抱いていたにもかかわらず具体的な行動には移さなかった。この矛盾の間にあったもの、それはショーペンハウアーに影響されていた悲観的な思想ではないだろうか。ショーペンハウアーは「女について」（『余録と補遺』、1851年）のなかで、全体を通して女性との恋愛や結婚に対して否定的であり、男性の視点から女性に関して悲観的な立場を示している。しかし、モーパッサンは自らの作品で、このような事象を批判するにしても、同じ男性側の視点から批判するのではなく、むしろ別の角度である女性側のまなざしによって捉えようとしていたのではないか。それこそが、モーパッサンが「Balzac des femmes du monde」になることを試みていた所以といえよう。

以上を踏まえて、我々はモーパッサンの作品を読むことで、当時の男性中心社会を生き抜いたフランス女性の姿を知ることができるだろう。また、作家が女性の読者に向けて小説を紡いだのだらうと考えれば、彼が残した社会的なメッセージを汲み取ることもできるだろう。先述したように、モーパッサンに限らず文学作品を通して女性の在り方や女性観を振り返り、改めて男女平等の在り方について考えることはできる。私は、ここに現代の読者にも強く訴えかける、時代を超えた価値が潜んでいるからこそ、現在でもこうした文学作品に触れる意義があり、読み継がれているのだと考える。今日、女性差別や女性解放について人々の関心がさらに深まり、こうした女性観に基づく社会運動もより盛んな時代になりつつあるが、日本は他国と比べて遅れをとっているといえるだろう。だからこそ、私はこうした文学作品が広く読まれてほしいと考える。

（文責：古賀優佳）

参考文献

Guy de Maupassant, Contes et nouvelles, texte établi et annoté par Louis Forestier, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1974-1979.

L'article « George Sand d'après ses lettres » par Guy de Maupassant, *Le Gaulois*, 13 mai, 1882.

Prévost Antoine Francois, *Histoire de Manon Lescaut et du Chevalier Des Grieux*, l'abbé Prévost ; préface de Guy de Maupassant ; illustrations de Maurice Leloir, Paris: Librairie Artistique - H. Launette, 1885.

カレイ

こ
ポ

の平たいカレイは、ほどよく水をつけてなでると、粒を出す。日頃動かずにじっとしているが、水のなかに入れるとすばしこく動き、ぬるぬるしてつかみにくい。フランシス・ポンジュ（フランスの詩人、1899 - 1988）がこうして魚に喩えているのは石鱈だ。わたしたちの生活に欠かせない、身近な存在である石鱈（固形）に、ひととき思いをめぐらせてみる。

ポンジュは『石鱈』と題した、全体としては一冊の本になる長い詩を書いたが、そこで石鱈を人工物ともみなしている：

自然には、石鱈と似たようなものはまったくない。これほどつるつるした小石（丸くて平たい石）や石ころはない。適量の水で刺激を与えつつ指のあいだに保つことができたとき、これほどふんだんな真珠の泡で反応するもの、これほどおびただしい房で過剰な泡を引き起こすものはない。

中身のないブドウ。石鱈の香りがするブドウ。

集合体。

石鱈は指のまわりの空気をのみこむ。水のみこむ。

（『石鱈』ガリマール、1967、p.19.）

こ

の部分、石鱈がぶくぶくと泡を出し、「饒舌、雄弁になる」（同、p.25）姿をあらわしている。泡は石鱈の言葉。物言わぬ事物に語らせることを理念とするポンジュの詩では珍しいことではないが、フランス語で泡を意味する「bulle」には漫画の吹き出しの意味もあり、吹き出しを次々と加えながらおしゃべりするイメージは泡を出す石鱈にぴったり重なる。言葉は自然にはない、人間がつくったものであり、ときにつかみどころなくすり抜けてしまう点が石鱈と共通している。

と

ころでポンジュは、石鱈を主題に書き始めたきっかけが第二次世界大戦時の物資不足にあると明かしている。石鱈は貴重になり、実際には泡立ちがよくない代物であった。それでも石鱈に語らせ、詩作を続けたのは、ドイツ占領下にあつて自由な表現が妨げられ、ときに沈黙を強いられる状況でのひとつの抵抗といえるだろう。『石鱈』が読者に促しているのは「知的な清め（la toilette intellectuelle）」（同、p.29）である。沈黙するのではなく、ひとかけらの石鱈をもとに言葉の垢を洗い落とすこと、言葉を鍛練すること。固定観念や先入観、戦時であればいっそうかまびすしいプロパガンダや虚偽、讒言によって溜まった汚れを落とすには、「もごもご言う（bafouiller）」泡でもかまわないから話さねばならない、とポンジュは考える。

さ

きほどの引用からは、虹色に輝き芳香を漂わせる泡が過剰にあるが、そうした言葉は内容空疎である、というほめかしを読み取ることができる。世にあふれる耳あたりのよい言葉に対する警戒を怠らぬように、と。言葉はよきにつけ悪しきにつけ人を感化する。そして、石鱈がそれを遣う人の「空気」と「水」をのみこむように、言葉自体がまわりの状況、時代や社会の空気を取りこんでいる。だからこそ、日々の生活でこの「一種の石」（同、p.18）をつかみ、なでまわし、シャボン玉をだれかと投げ合うことは、ゆかいで、はかなく、ときにあやうい。

カ

レイの仲間、シタピラメの名はまさに舌のかたち由来することから、おしゃべりにかけて今回のタイトルを「舌平目」にしようかと誘惑に駆られたが、『石鱈』に清められて踏みとどまった。そもそも液体石鱈が広まった昨今では、石鱈のかたちが舌を連想させる機会は失われつつあるようだ。しばしば泡と戯れるこのごろ、石鱈が文字通り身を削って尽くしてくれることをありがたく思う……というような文章も、いずれ通用しなくなるのかもしれない。

（文・絵：綾部麻美）





L' Echange

日仏工業技術会では新規会員を募集しています
趣旨にご賛同くださる方であれば、学生・社会人等を問わず歓迎です。
下記 HP の「正会員入会申込書」に、必要事項をご記入の上、本会事務局までお送りください。

<http://www.sfjti.org/about/admission/>



江口久美 九大・決断科学センター
Kumi EGUCHI

やっと第九号が完成しました。今回は、都市計画史研究者の松原康介氏にインタビューをさせていただきました。フランス語圏地中海地域の奥深さに触れることができました。編集特派員も随時募集していますので、お気軽にご連絡ください。



綾部麻美 慶應義塾大学
Mami AYABE

自然界の多くのものは線対称の構造をもっていますが、カレイやヒラメの「寄り目」にはかたちの豊かさを感じます。「平板で偏りがある」ところが魅力です。



角玲緒那 (株) 建文・建築文化研究所
Reona SUMI

いつもありがとうございます。フランスでも床下に入ってみたいですね。みなさまも建築の床下ぜひ気にかけてみてください。



古賀優佳 九州大学大学院人文科学府
Yuka KOGA

今回で3回目となる寄稿の機会をいただき、ありがとうございました。最近、自宅で作るフランス料理にはまっています。コロナが終息したら、フランスをゆっくり旅行したいです。

sfjti 日仏工業技術会

日仏工業技術会は、創立者故菊池真一先生（東京大学名誉教授）が、1955年フランス大使館文化部（1969年独立して現在フランス大使館科学技術部）参事官（当時）C.d'Aumale氏の要請を受け、当時経団連会長の石川一郎氏に初代会長就任を願い発足いたしました。往時の日本では、フランスの「文化の国芸術の国」としての側面のみが強調され、科学技術、特に工業技術についての情報は殆どない時代で、今日の現状と比べると今昔の感があります。本会はこのような状態を打破すべく、フランスの工業技術、その基礎となる工業技術研究、工業技術の高等教育制度、社会基盤など、工業の背景にある文化、社会を理解しながら、より広範囲の工業技術をわが国の産業界、研究者、学生などに紹介することを設立以来一貫して努めています。

【日仏工業技術会事務局】

連絡先：

150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館内

E-mail : info@sfjti.org

HP: <http://www.sfjti.org/>

日仏工業技術会への入会のご案内

日仏工業技術会は、駐日フランス大使館の協力を得て1955（昭和30）年に設立され、日本とフランスの工業技術の紹介と普及および両国の技術者の交流促進を目的として活動してきました。日仏両国と深い関係にある企業や研究機関、内外の最新知識を求める技術者、研究者、学生に加入いただき、日仏会館関連の学会の一つとして、最新の有益な情報を会員の皆様に提供しています。

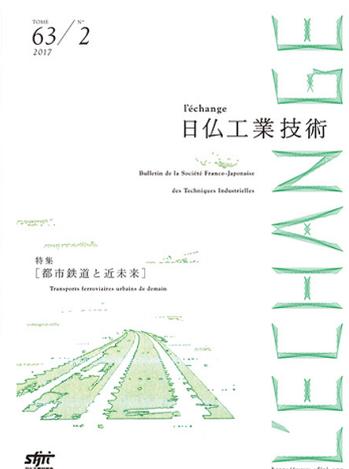
フランスは芸術やファッションと食文化の国として知られていますが、同時に科学や産業技術の面でも最先端を行く国の一つです。フランスの優れた科学技術を知るために、日仏工業技術会はいくつかの専門委員会を置くとともに、「建築・都市計画」「鉄道・交通」「原子力」「情報通信」などの分野の最新テーマを選び、両国の専門家によるシンポジウムやフォーラムを開催して、日仏間の情報の架け橋となってきました。

年二回発行する『日仏工業技術』誌は、日仏の工業技術に関する広範な知識を提供するだけでなく、「先端医療技術」、「水素エネルギー」、「繊維が紡ぐ日仏交流」、「木質建築の現在と未来」「都市鉄道の近未来」など、様々な切り口で毎号に特集を組み、底流になる日仏の文化の差異なども紹介しています。創刊60周年記念特別号『現代科学を問い直す』は、科学技術のあり方の根源を求めて2016年に開催した連続講演会の内容を掲載しています。また、フリーペーパー『L'Echange』は若手研究者が編集し、最新のフランス情報を提供しています。

毎年秋には、在日フランス商工会議所とともに、富岡製糸場、海洋研究開発機構、神奈川県立がんセンター、キッコーマン野田工場など、先端技術の現場や日仏交流の遺産などの見学会を開催しています。

一人でも多くの方が入会されて、日仏交流の活動に参加して下さいますよう、心からお待ちしています。

日仏工業技術会会長 菅 建彦



写真左よりシンポジウムの風景、資生堂研究所見学の際の集合写真、会誌の表紙例

入会申込書

入会申込日： 年 月 日

貴会の趣旨に賛同し、正会員または学生会員として入会を申し込みます。

会員種別	正会員 (5 千円/年) 学生会員 (2 千円/年) (○で囲んでください) (いずれも入会金は無)
氏名	ふりがな： 漢字表記： 印 英語表記：
生年月日	西暦 年 月 日生
勤務先・在学先 (部署・学科まで)	
勤務先住所	〒 TEL: FAX: E-mail:
自宅住所	〒 TEL: FAX: E-mail:
会誌送付先	勤務先・在学先 自宅 (○で囲んでください)
学歴	大学 学部 学科 年卒業・見込 大学 研究科 専攻 修士課程 年修了・在籍中 博士課程 年修了・在籍中
専門	
通信欄	

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館内 日仏工業技術会

e-mail: info@sfjti.org

振込先：みずほ銀行 恵比寿支店恵比寿ガーデン出張所 普通 1349506

三井住友銀行 神田支店 普通 0321637